学 位 論 文 要 旨

学位論文題目　　学校改革を引き起こす教師の職業的発達と戦略

申 請 者 氏 名　　原田拓馬

本研究では、学校改革を引き起こす教師の職業的発達と戦略のリアリティを、そのキャリアに着目し、学校内のアクターである教師集団との相互作用過程に焦点化して描き出した。まずは、本研究が各章で分析して得た知見を、先行研究との対比から提示したい。

第１章では、本研究の目的と対象を設定した。先行研究において、学校改革を引き起こす教師は、同僚性・協働文化を持ち、学校改革を推進する教師集団への文化適応を遂げた上で、トップ・リーダー（校長などの管理職）やミドル・リーダー（制度的役割・地位につくベテラン教師）など、教師のキャリア・ラダー型職業的発達モデルに一定の位置を占める存在として理解されてきた。それに対して、本研究では、行為者個人としての教師による「学校改革を引き起こす教師」という社会的カテゴリーへの帰属をめぐる職業的発達と、それに即して組織される戦略を描き出すことの意義を指摘した。

第２章では、本研究の調査方法の特徴を提示した。先行研究における教師対象の調査方法は、学校内での組織上の公式手続きを経由するフィールドエントリー方法を採用し、学校内のステイク・ホルダーに周知された状況下で調査実施に移行するというものであった。それに対して、本研究では、従来的な調査方法によるインフォーマントの調査被害のリスク認識とそれを回避する自己の秘匿性の防衛戦略の遂行を念頭に置いて、教師サークルなど学校外のインフォーマルな場での個人間での私的手続きを経由するフィールドエントリー方法を採用し、若年教師期に学力下位層私立高校で学校改革を引き起こした経験を持つ２名の教師に対してインタビュー調査を実施した。

第３章では、学校改革の始動の契機を描き出した。先行研究では、個別的な学校の置かれた社会的文脈に依拠して学校内で組織される教育活動は、教師集団全体のコンセンサスを得た「主流の学校文化」として描き出されてきた。それに対して、本研究では、「公立補完校」「受け皿」と評される学力下位層私立高校において、学校改革を引き起こす教師が、インフォーマルな教師集団（改革者集団）を形成して「現場の教授学」の異化・再構築の拠点をつくり出し、学校改革の始動の契機を構成する様子を描き出した。

第４章では、学校改革を引き起こす教師が、改革者集団の形成を通じて「現場の教授学」を異化・再構築し、学校改革案を立案した後、学校組織のフォーマルな意思決定の場においてその成立を目指して実践する〈根回し〉に焦点化した。先行研究では、学校組織のフォーマルな意思決定の場自体に関する理論的・経験的研究が蓄積されてきたのに対して、本研究では、学校改革を引き起こす教師が、学校組織のフォーマルな意思決定の場での学校改革案の成立を目指して、その提案以前の段階のインフォーマルな場で実践する〈根回し〉に着目し、その戦略的諸相を描き出した。その主たる知見として、《利益供与者》《理解者》《献身者》《秘密の暴露＝共有者》《相談者》という自己呈示戦略の５つの相を描き出した。

第５章では、学校改革を引き起こす教師が、学校改革案の成立後、既存の教師集団の教師との間で築く相互作用過程を描き出した。先行研究において、教師集団の文化傾向が学校改革の推進要因／阻害要因として検討されるに終始してきた。それに対して、本研究では、学校改革を引き起こす教師が、「学校改革を引き起こす教師」として職業的発達を遂げる中で、既存の教師集団の教師から価値逸脱的な挑戦という属性がスティグマ化されて負の処遇を受ける反面、自己スティグマ化を通じて戦略的振る舞いを組織し、ダメージを減らす様子を描き出した。また、その自己スティグマ化を通じた戦略的振る舞いによってカ

リスマ化し、改革実現行動を継続可能とするが、その背景として教師集団の保守性・閉鎖性を切断して同僚性・協働文化を構築し、教師集団による支持を形成する様子を描き出した。

第６章では、学校改革を引き起こす教師が、教師集団による支持を形成し、数年間に渡って自身の手で形成し、発展させた持続的改革から能動的離脱を遂げる様子を描き出した。先行研究では、教師集団の同僚性・協働文化を構築して持続的改革を形成し、発展させることが理想化されてきた。それに対して、本研究では、学校改革を引き起こす教師が、教師集団に構築された同僚性・協働文化の逆機能ゆえに持続的改革から離脱を遂げる反面で、その同僚性・協働文化が仲間教師の離脱に直面して反面教師的につくり上げられたものであることを指摘した。

以上に示した本研究の知見は、学校改革を引き起こす教師が、同僚性・協働文化を持ち、学校改革を推進する教師集団への文化適応を遂げて、校長などのトップ・リーダーや、ベテラン教師などのミドル・リーダーといった制度的役割・地位に登用された教師としてのみ限定的に捉えられてきた先行研究上の通説的議論に対して再考を迫る。すなわち、制度的役割・地位につかない若年教師であろうとも、インフォーマルで局所的な改革者集団の形成を契機として、「学校改革を引き起こす教師」として職業的発達を遂げて、それに即した多様な戦略の組織を基盤としたロアー・リーダーとなることが可能なのである。

（様式９）

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 107 号	氏　名	原田　拓馬
論文題目	学校改革を引き起こす教師の職業的発達と戦略		

（論文審査概要）

原田氏の学位論文は、序章および終章を含めた全８章から構成される。

序章では、まず「学校改革」という用語を先行研究の検討から学術的に定義する。そのうえで、従来の学校改革研究が研究者の予め設定したモデルに従って説明が繰り返されてきた限界を指摘し、本論文での具体的な研究課題を６点設定した。それが「学校改革を引き起こす教師の職業的達成と戦略」を明らかにすることである。

第１章では、本研究の目的と研究枠組みについて論じている。先行研究では日本の教員文化は同僚性・協働性を特徴とするため、学校改革は教師集団への文化適応を遂げた上で、管理職やベテラン教員によって組織的に実施されるとされてきた。しかし実際は、それら条件は必ずしも必要ではなく、教員個別の職業的発達と戦略によって達成することが可能であることを指摘する。

ただし、それを実証するには、従来のような学校を通した調査研究ではなくインフォーマルな場でのラポールに基づく調査方法を採用する必要があること、本研究においては研究対象を学力下位層私立高校での学校改革を若年教員期に経験した教員に限定することが第２章で述べられる。

第３章では、学校改革の始動契機を描出している。そこでは、インフォーマルな教師集団（改革同意者集団）を形成して、支配的な教師文化・認識を異化し、新たな教育活動を再構築する必要性の認識が共有されることが求められる。

そして第４章で、実際に改革立案から遂行されるまでの様子を描く。特に、学校組織全体のフォーマルな決定を得るためになされるインフォーマルな根回しの様子や、その戦略（「利益供与者」「理解者」「検診車」「秘密の暴露=共有者」「相談者」）をデータに基づいて分析する。

第５章では、学校改革案成立後、改革に乗り気ではない教師集団との間で軋轢が生じたり、スティグマを貼られないようダメージを減らす様子や戦略的振る舞いについて描き、第６章において、学校改革が順調に進められるようになったのち、牽引した教員が改革から能動的に離脱する動機・様子を描いている。

終章では、本論文で示したモデルのさらなる検証のために学校種を変えたり、設置者別（公立／私立）に事例比較を検討する必要があること、また学校改革を牽引した教員の異動後のキャリアについて追跡することを今後の課題として述べられている。

審査委員会では、本論文に対して、以下の観点から評価を行った。

１．創造性

従来の学校改革に関する先行研究では、学校改革の成功の鍵は、組織体制でトップダウン式になされることであるとされてきたが、本研究ではデータ収集に工夫を凝らし、必ずしもそれらは要件ではなく、若手教員や個人であっても、戦略によっては改革を進めることが可能であることを明らかにした。こうした知見はこれまで提出されておらず、創造性において極めて優れている。

２．論理性

従来の説が合理的でない点を示したうえで、本研究では教員個人に焦点を当てることで、学校改革の「始動期・改革期・離脱期」の３段階から丁寧に解明している。特に、これまで見られなかった離脱期を描くことで新たな視点を提示できており、いずれの分析結果も結論へと導く点で一貫性を確保している。よって、論理性について極めて優れている。

３．厳格性

「学校改革」「教師の戦略」「スティグマ」に関する先行研究が十分に渉猟咀嚼されており、本論文が証明しようとする仮説の論拠となる文献資料が適切になされている。また、本調査は匿名性の確保が極めて重要であるが、データの収集・分析・公表に関する取り扱いについて調査対象者の同意を得て、研究倫理に十分な配慮がみられる。よって厳格性の点においては極めて優れている。

４．発展性

本論文は２つの私立高校での事例研究であるが、綿密なデータ分析から検証が為されている。今後、異なる校種および設置者（私立／公立）の学校改革においても本研究の知見が立証されれば、より普遍性の高いモデルの形成へと発展しうる。したがって、発展性の点においては極めて優れている。

以上、審査委員の合議により原田拓馬氏の学位論文審査結果を「合」とする。

論文審査結果
合・否

審査委員　主　査　（氏 名）石井　由理

（氏 名）松岡　勝彦

（氏 名）鷹岡　亮

（氏 名）田中　堺紘